

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「知的生産の技術」の今

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久保, 正敏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4857

梅棹忠夫とは
何者だったのか

「知的生産の技術」の今

今、巷にはさまざまな勉強法や仕事術の本が出ているが、それら知的ノウハウ本の先駆けとなったのが梅棹忠夫著『知的生産の技術』（一九六九年 岩波新書）だった。二〇一〇年現在で八六刷、累計二三六万部、刊行から四〇年以上経て今なお読み継がれている。パソコンやインターネットの普及で情報に対する考え方や、扱い方も急速にさまがわりしたにもかかわらず、その視点と主張は少しも色褪せていない。むしろ昨今の情報化時代を見据えたかのような思索は、今日の知的生産の方法にヒントを与えるものとなっている。梅棹忠夫にとって、情報とは何だったのか。その先見性は何に裏打ちされていたのか。

久保正敏

[Kubo Masatoshi]

「知的生産の技術」が色褪せない理由

読む、書く、考えるといった行動を「知的生産」活動と見なし、人々の意識をそこに向かわせた功労者は、紛れもなく梅棹さんです。梅棹さんは、知的生産とは〈頭をはたらかせて、なにかあたらしいことから——情報——を、ひとにわかるかたちで提出すること〉だと定義されました。日本がまだ工業化をひた走っていた時代に、形あるモノを創造するわけではない頭脳労働を「知的生

産」と名づけることでその価値を明らかにした。しかも、それはけっして一部のインテリだけのものではなく、誰でもできることだという認識を広めました。

刊行当初は、とりわけ情報のカード化といった具体的な技術が大きく着目されましたが、もはや紙と鉛筆の時代ではなくなった現代にもなお多くの読者を得ているという事実は、『知的生産の技術』がハウツーものというよりは、情報とその創出に対する考え方を提起するものであることの証（あかし）でしょう。だからこそ時代の変化を越



【知的生産の技術】(岩波新書、1969年)

えた普遍性を持っているのだと思います。

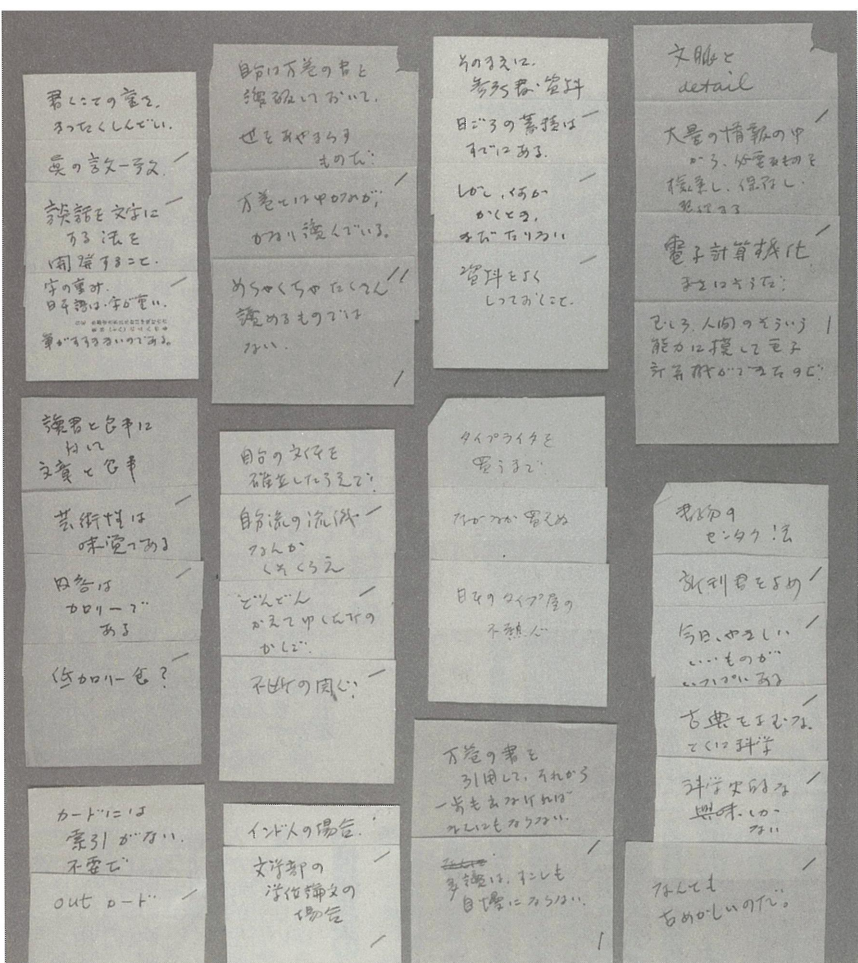
現在、研究者にしても学生にしても、カードで情報を整理している人はほとんどいないでしょう。しかし、情報を小分けにカード化し、それを繰り返し組み替えるなから、思わぬ関連性を発見し、情報を新たに生み出す、というその発想は、むしろパソコンの利便性を生かせる時代になっていっそう意義が大きくなったと言えます。インターネット元年といわれているのが一九九五年、

すでに梅棹さんは目が不自由になられていたのでご自身でパソコンやネットを駆使することはなかったのですが、『知的生産の技術』は来るべきコンピュータ時代に、より活用の途が広がると、先生は想定されていたはずですが、紙と鉛筆がパソコンというツールに変わったただけで、個人が知的生産をしていくために必要な基本的な考え方は変わらない。だから少しも古びることがないのです。

「情報化の時代⇄脳の時代」到来を予見

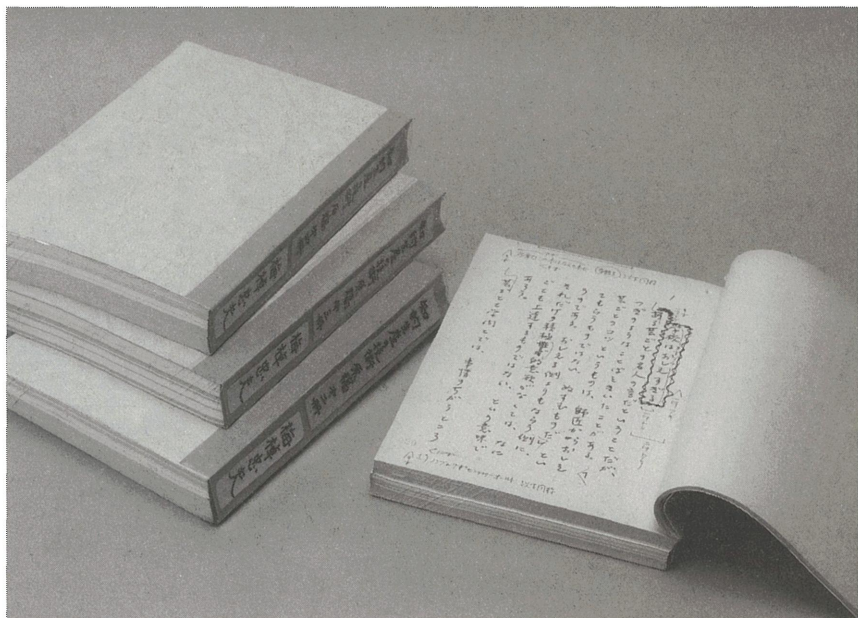
私が梅棹さんの見解の真骨頂だと思うのは、情報を「感覚器官から受けた信号を脳内で咀嚼・解釈したもの」。「脳内で整理・編集されてあふれ出たもの」、すなわち情報の受発信どちらにおいても相手を前提としない、極めて主体的なものと考えたところです。興味は湧かなければただ通り過ぎ消えていってしまう素材も、受け手の行動や感情に作用すれば、その人にとっては有益な情報になる。脳に入って脳神経系を活動させるものが情報であり、そうした脳活動こそが生ける証しだと言われたわけです。

その根拠を、生物学的アナロジーによる産業史観に則



【知的生産の技術】執筆のための「ごさね」(メモカード) 写真：国立民族学博物館提供

つて考えられた。農業を軸にした時代には、「食う」ことを考え、消化器官系を中心とした内胚葉諸器官（消化器）を充足させることを目的に生きていた。続く工業化の時代には、筋肉や骨を中心とする中胚葉諸器官の機能を拡充させて、モノやエネルギーを作りだした。そして今や人類は脳神経系を中心とする外胚葉諸器官の機能を充たすことを求めるようになっていく。だから脳や感覚を駆使した分野がこれからの時代には伸びていく。これからは情報産業に重心が移ると見通されていたのです。これは「情報産業論」（一九六三年）という論文で情報産業の意義を説かれて以降、梅棹さんが繰り返し仰っていたことです。実際に私たちは情報化の波の中で人間がどんどん脳の働きを重視するようになっていく経緯を見てきています。梅棹さんの説いた情報産業の



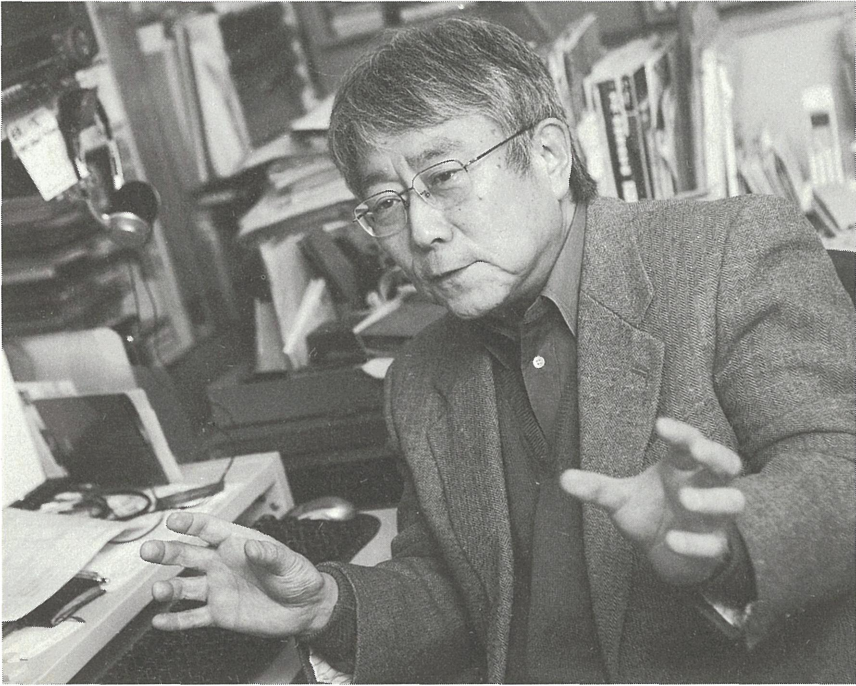
『知的生産の技術』手書き原稿 写真：国立民族学博物館提供

時代は、まさに脳の時代と言って間違いないことを私たちはよく知っています。これは実に卓見だったと思います。

梅棹さんは、情報のもたらすものが何かをただ世相を見て語っていたのではないのです。現象は現象として観察しつつ、一方ではこうした状況を引き起こしている要因がどこにあるかを、生態学などのマクロな視点から考えておられた。頭の中に、常にマクロの視点とミクロの視点が共存していて、それらの間を自由に往還しながら思考していたのだと思うのです。

では、マクロとミクロ、両面の視点を培うために何をされていたのか。

一つは、その物事の体系を知る、あるいはそこにある法則性を見出そうとすることです。たとえば、これはこういうモデルとして体系づけられるのではないかと考える。一方で、フィールドワークを通じて徹底的に自分自身で調べる。自分の目で、足でモデルの妥当性を検証する。つまり、マクロで捉え、ミクロで体感して確かめる。その習慣は両輪のように絶えず梅棹さんの中にあつたのではないかと思います。



そして自分の見聞きしたことの記録をつぶさに残し、研究成果として発表するだけでなく、自身「思考の肥やし」とされた。その累々と残された梅棹さんの思考の肥やしは、みんなくには膨大に残っています。先生は自分というフィルターを通した情報を残して可視化の中で、客観的な体系づけの思考を実践していたのです。

今、その膨大な資料を共有化するための作業が進んでいます。梅棹さん自身が望まれていた情報の共有化。プロもアマも関係なく、誰もが自由に利用することができる施設——それが梅棹さんのみんなく設立の大きな理念だったわけですが、梅棹さんの脳の一部が外在化されたアーカイブズに、実際に誰もがアクセスできるようになりつつあるわけです。

頭の中で情報と情報をどつリンクさせるか

梅棹さんの文章がわかりやすいのは、もちろん短くて締まった文体もあるでしょうが、さまざまアナロジーをうまく駆使されたからでもあると

思います。その展開に無理がないから、みんな納得しやすい。つまり、何かと何かを関連づけることにとても長けておられたのです。

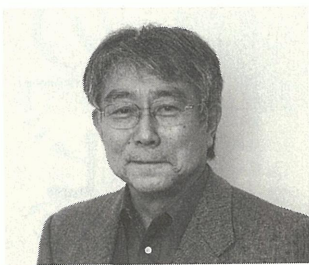
たとえば、モンゴルの草原の羊の群れの行動の相互関係を探るために、オタマジャクシの群れで実験する。梅棹さんはこの研究で学位を取られますが、普通は羊の群れをオタマジャクシと対応させられるとは考えません。しかしそれを対応させられると考えたのは、生物学への造詣が深かったことと、何かと何かを紐づけ結びつけるセンス、その力が人とはひと味もふた味も違っていたからだと言えるでしょう。

あるいは、「文明の生態史観」（一九五七年）のようなグラウンドセオリーがどうやって生み出されたか。アフガニスタン、パキスタン、インドを自分の目で見、足で歩いてるうちに思いついたと言っておられますが、ご本人の中に生態史というマクロな視点があり、一方でフィールドワークを通じて体で感じとった感覚があり、それが頭の中で見事に結びついたことで、余人の考えつかないような文明史観にいたったわけです。

個々人が新しい情報を生みだしていくために一番大事

なのは、頭の中で新たな関連づけができるからです。あるモデルを見出し、それを他のものに紐で結びつけられないかという発想、これは今日で言えばうまくリンクを張れるかということになるうかと思えます。

それを可能にするためには、まずは旺盛な好奇心でたくさん情報を自分の脳に取り入れること。何か新しいアイデアを思いつくというのは特別な才能がないとできないわけではなく、何かと何かを関連づける紐を自分で見つけ出していくこと、リンクする力を磨くことにより開かれていくと言えるでしょう。それが現代の「知的生産の技術」の一つではなからうかと思えます。（談）



くば・まさとし

1974年京都大学大学院工学研究科修士課程電気工学第二専攻修了。86年工学博士（京都大学）。京都大学工学部情報工学科助手、国立民族学博物館第五研究部助手、助教授、同館博物館民族学研究部教授などを経て、2004年より同館文化資源研究センター教授。著書に『コンピュータ・ドリーミング オーストラリア・アポリジニ世界への旅』（明石書店、1995年）、『マルチメディア時代の起点 イメージからみるメディア』（日本放送出版協会、1996年）、共編著に『水の器手のひらから地球まで』（人間文化研究機構、2010年）などがある。